

編集室から

ある講演で、こんな話を聞きました。家族や周りの人に何かを依頼して断られるのは、それ以前の間人間関係に拠る。して貰っている方が多いと、話を聞いて貰えない。他人の喜びを自分の喜びと感じられるフォワード本能在、人間だけに与えられている。自分の中に、この能力を見つけ出し、今すぐ関係を変えよう！と。

「こんなにも、してあげているのに...」という愚痴を耳にすることがありますが、それはテイク（受取）しようとしている心が漏れ出した言葉です。ギブ&テイクではなく、何処までもギブし続ける中で、Be Given（与えられる）に出逢うと、感動と喜びは、きっと何倍にもなることでしょう。ほんとうの幸せとは、そんな中にあるものなのかも知れません。

今月の表紙写真は、昨年の今頃日本中が湧いた金環日食の撮影で静岡県に行った時のものです。石川県在住の静岡県人會のお世話をさせて頂いている関係で、ギネスにも登録されている世界最長の木橋のことを耳にしていました。

維新で俸禄を失った武士が、牧之原台地を開墾して茶畑栽培を始め、それが軌道に乗り、周辺集落との生活物資の売買の便のため、村人によって明治12年に掛けられ、以後度重なる被災流失にも架け替え続けられて来た橋でした。

今はほとんどが周辺地域からの観光客の通行（有料）のようです。しかし北陸からわざわざ訪ねてくる人は、稀かも知れません。

この時、運転助手にと、妻を伴っていたのですが、妻への報酬はこの辺り一番とうわさの島田駅前にある老舗鰻舗で夕食のうな重だけ。にも関わらず、道中で必ずキラリを見つけては喜んでくれます。家内には、いつもしてもらってばかりの我がまま亭主なのに、何よりも有難く、心中で深く頭を下げたのですが、この橋が縁結びに利くらしい事は帰宅後知りました。（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川畠さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2013/05

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2013/05

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

泉 月



世界最長の木橋：蓬萊橋
静岡県島田市にて
by hama

寄稿 『大人になることは』

NPO法人関西こども文化協会 常務理事 蔦田夏

「大人になるってどうということだと思いませんか？」不登校の子どもの支援にあたっているスタッフ研修の場で講師が投げかけた質問です。参加スタッフは考え込んでしまいました。おそらく、今までこのような質問を受けたことがなかったでしょう。

「自分の失敗や起こしたことを親の責任や人の責任にしないことだと思えます。とくに親の責任に。自分の人生に責任が持てるようになることだと思えます。」発言したのはひとりの女性でした。彼女は小学生から不登校で精神科に入退院を繰り返してました。高校をやったのことで卒業し、短大も中退しました。精神科に入院してもなかなか改善しない中、カウンセリングによって少しずつ自分を取り戻し、三十歳を過ぎたころ、両親にあてた一通の手紙から社会参加ができるようになりました。

「もう、働けるかもしれない、でも、その前にどうしても両親に言いたいことがある」、彼女はその気持ちを手紙にしたためました。書き上げるのに六カ月、両親に渡す勇気がなく、渡したのはその六カ月後でした。書き始めて一年以上が経過していました。

書き始めは「お父さん、あなたは、私が生まれたときにどのように感じ、何を考えましたか？」という質問から始まりました。「私はあなたに愛されたかった」。子どもは親に愛されるために生まれてくるのです。幼い時から彼女が両親に持っていた心のわだかまりが冒頭からびつしりと書かれていました。B5版原稿百五十ページ。まさに、両親に対する告発文でした。

思わぬことが起こりました。父親から返事がきたのです。「告発してくれてありがとう。書いてある内容はすべて事実です。なにげない言動があなたをこんなに苦しめていたなんて想像もしませんでした。(中略)子育てのやり直しをしたいけれどそれもできない。しかし、あなたに子どもができたならこの経験を生かしたい。だから、恐れる

ことなく結婚問題に取り組んでください。」「手紙の最後に「愛する娘舞子へ。」と書いてありました。彼女は最後の言葉を読んだ外の世界へと飛び立つことができました。

私は、「親を殺したいほど憎い」「兄弟も憎い」「自分だけが愛されてこなかった」このような感情を抱く青年の就労支援をしています。年齢は三十歳〜四十五歳くらいまで。今まで一度も働いた経験もない人もいます。インターンシップの経験を重ね、人間関係を学び、最終的には就労へと繋げていきます。

しかし、就労支援の前にもうしてもやらなければならぬことがあります。それは、家族関係の改善です。「殺したいほど親が憎い」という感情、「きょうだいがいなければならない」という歪んだ感情からの回復のためには、子どもの自尊感情を育て、自分で決めた物事に対して自信を積み重ねることができるようになります。三十歳であるうが、四十歳であるうが子どもは子どもです。喪失した子ども期を再生させることがとても重要です。親も相当努力が必要になってきます。そして、子ども観の転換を図らなければなりません。とても苦しい作業です。

家族関係の改善は彼らを元氣していきます。家族関係が全ての問題解決に至るとは限りません。若者の生き方を積極的に支援しない国の施策もまた大きな問題です。

しかし、大方の青年が両親との関係を改善することで自分の生き方に確信をもち、困難を乗り越える力が育つのも事実です。

「愛されるために生まれてくる」。すこしい言葉です。親から愛され、他者から愛され、豊かな人間関係の中で人は人として成長することが出来ます。

若者が大人へと成長することが困難な社会環境にある中で、青年期を豊かに過ごし、大人へと成長させるための手立てが今求められています。

ところで、「大人」ってどういう人のことでしょうか？。



【プロフィール】
（つただ なつ）ストレスカウンセリング・センター・カウンセラー・引きこもり相談・就労支援（主に三代後半〜四十代前半）に取り組み。大阪府寝屋川市立小学校評議員・家族問題研究会メンバー

濱のつばやき 『祈り』

精神や宗教のお話では無い。

先日、遺伝子研究の世界でノーベル賞候補ともささやかれている筑波大学名誉教授の村上和雄先生を始めとする内外の科学者たちのドキュメンタリー映画「祈り」を自主上映させて頂く機会を得た。この映画は、科学が、祈りという心の世界に対して、ここまで迫ってきているという最新の状況を判りやすく伝えていた。以下は、その概要報告である。

思考が遺伝子のスイッチをオン／オフする
ネガティブな思考で、病気になる遺伝子のスイッチがオンになる

・笑い・ポジティブな思考で、健康になる遺伝子のスイッチがオンになり、病気になる遺伝子のスイッチがオフになる（つまり「病は気から」）
祈りの影響は時空を越える

・祈られた人の病状が、統計的にも明らかに回復
・この実験は米国西海岸から東海岸の患者に対して秘密裏に行われた

・祈りの対象はイースト菌でも効果が測定可能
人間は思考を奏でる楽器である
・あたかも楽器のごとく、人の思考は振動（波動）を

励起する

その振動は周囲の場に伝播し、同席するものに影響を与え（つまり、貴方の不機嫌は周囲に悪影響を及ぼしている。なんと恐ろしい！）
祈りとは

・神や他人がイイネと乗れる内容（意）が「意乗り」
・自分だけのエゴで神や他人が乗れない内容は「願い」
科学的に証明されたこと、証明されつつあることは、いずれもかつての日本人が、文化的に当たり前と捉えてきた「祈り」にまつわる驚くべき影響力・範囲ばかりであった。

ラストシーンで、先生が「有難う・おかげさまで、英語に直接訳せない言葉を使っている日本人の根底には深遠な『宇宙（この世界）』に対する理解がある。日本人は、西洋と東洋を学び、二千年の伝統を持っている。二十一世紀は日本人の時代である。」と、にこやかに語っておられた。

上映会場を埋め尽くした方々の多くが、感動され、涙を流されていた。

この国は今、激動する混沌の只中にある。しかし、その民こそ、新しい時代の洋の東西を結び架け橋になれるんだという先生の静かな祈りは、銀幕を越えて観るものの心の底に響き亘っていた。

ハゲタカファンド¹⁾は、瀕死の会社を目ざとく見つけて群がり、何らかのリターンを得て去っていく。このリターンには、再生させて買値より高く売るといったものや、残っている資産を最適な所へばら売りするというものなどがある。その強引な手法やハゲタカという語感からネガティブな印象を受けがちであるが、金融システムのなかで一定の機能を果たすものであり、ターゲットになった会社にとってベターな選択となることも十分ありうる。一方で経営権はファンドに事実上掌握され、利益を生まない事業や人員は容赦なく切り捨てられることを覚悟する必要がある。

資金提供者は、当時の当社との関わり限定すれば、ハゲタカファンドに近い役割を果たしており、上述の構図が当てはまる。しかも、アングロ・サクソンのジェントルマンとは少し違う相手だ。資金提供者の関与を受けた時点では、この選択が吉と出るか凶と出るかは賽を振ってみないと何とも言えなかった。その結末がわずかな傾きで吉に転がった理由は、新社長の存在抜きに語れない。

資金注入後、誰もが尻込みするような資金を出したという圧倒的な事実と、我々の常識が通用しない相手かもしれないという得体の知れなさをバックにした言葉の圧力を、新社長はほぼ一人で背負っていた。虚像や幻影に怯えているだけではないかと思うこともあったが、それは対峙していないからこそ言える戯言に過ぎない。丁々^{いのち}発止の全ては新社長の側にいた私でさえ知り得ないが、新社長の命運を彼が握っていたことだけは確かだ。

恐らく弱腰を見せたら付け込まれていただろう。もしくは、見放されていたかもしれない。資産をばら売りされ、骨の髄までしゃぶり尽くされていた可能性もないとは言えない。

しかし我々には逃げない新社長がいた。いや、逃げないどころが、圧倒的に不利な状況でふらふらになりながらも、彼に自分や会社の魂を委ねることは決してしなかった。資金提供者と正面から渡り合い、保身のために相手におもねることもなく、常に前を向く。そういうハートが賽の目をも動かしたのである。

当時、全巻を揃え貪り読んでいた漫画「北斗の拳」に、次のような台詞がある。
「退かぬ 媚びぬ 省みぬ」

絶体絶命の状況下でもなお、サウザーがケンシロウにプライドを持って言い放った言葉だ。新社長は、まさにサウザーのこの台詞を地で行くような立ち回りを見せてくれた。もっとも、悲劇的な過去を持つ冷酷非道の男という点は、サウザーと異なり、そしてその後の結末は異なっているが。

そしてやがて、別の傘を差し出す者が現れ、土砂降りも止み、資金提供者は紳士の如く我々の前から闇へと静かに去っていったのである。

1: 企業再生ファンドのことであるが、瀕死の企業を探すことから、ハゲタカに例えられてハゲタカファンドと呼ばれることも多い。筆者は、ハゲタカ自体が自然界における掃除屋として重要な役割を果たしていることに鑑みて、本コラムではあえてこの別称を用いている。

4月15日(月)に四店舗目となる『日本酒バルChintara』を東京・渋谷にオープンさせました。コンセプトは「日本酒は世界に誇れる最高の食中酒である」事を実際体現するため和洋中に関係なく日本酒を楽しんでいただく飲み物は日本酒しかない専門業態です。とまあ店の宣伝はこのへんにしておいて、今回は"渋谷"という街について気づいたことを書きたいと思います。

江戸時代は渋谷川の谷に位置しており、田園が続く田舎の集落でした。明治時代以降は山手線が開通し、それ以降東京市電、玉川電鉄の開通により交通の結節点として発展してゆくわけですが、最も影響を与えたのは五島慶太の率いる東京横浜電鉄です。渋谷駅に東横百貨店を開業させたことで、従来銀座・上野方面へ市電やバスで向かっていた東急沿線住民が渋谷で買い物をするようになったことが現在の渋谷の原点と言えます。それ以降の発展はご存知の通り、世界に向けた「若者文化の発信地」という揺るぎないポジションを確立していますし、近年はそれに加えてオフィスビルの開発も進み、日本でも有数のビジネス街として顔が出来つつあります。

渋谷の中でも私のお店がある場所は「道玄坂」というエリアでして、過去には様々な文学作品の舞台となっております。恐らくこの一体は昔置屋街であったため、世間とは乖離した隠微な雰囲気作家の創作意欲や舞台としての創造をかりたてたのではないのでしょうか。そして道玄坂は今もその流れを汲み日本で最もラブホテルや各種風俗産業が集積する地域のひとつであり、多様な人種が集まる街です。今でも表通りをビジネスマンが闊歩する様相とはかけ離れた世界がそこにはまだあり続けるわけです。

そんな渋谷にオープン準備から通い続けておよそ半年。強烈な"欲"という熱に浴びせられ、のぼせ気味のこの頃です。デカイ声で自分の自慢話ばかりする人と長時間いた感じです。気分はもう最悪です。人が吐き出す欲というのは、人にこれだけの影響を与えること、そして毎日ここにいると"慣れる"ようになり"染まる"んだらうなという恐怖ですかね。

最近では子供たちを成人向けサイトにアクセスさせない取組・ソフト開発がされていますが、実際にこのような地域には歩いて行けるわけで、子供たちを守るという観点に立つならば、リアルの場においても立ち入り制限を設けないといけないのでは?と真剣に思う2歳児の娘を持つ父親なのでした。

『富士の国から ~大魔神のたび~』 寸又峡温泉開湯50周年記念まちづくりフォーラムPART2 先輩も若者も地域を変える 静岡県職員 溝口 久

開湯50周年記念事業として何か企画してくれないかとの寸又峡美女づくりの湯観光事業協同組合の望月孝之組合長からの相談で、「学びと交流」の場を寸又峡温泉につくりたいと想い「若者が地域を変える」と題したフォーラムを6月30日、7月1日(土日)に開催することにした。これで終わりだと思っていた。

ところが、またまた望月さんから「もう一度やってくれないか?今度は地元が出席しやすいようにしたい。まだ、1回目の余韻が残っている内に」とのリクエスト。「ならば、年内の金土で開催しましょう。」開催日を12月14,15日(金,土)にまずは決めた。

前は若者にスポットを当てたので、今回は地元で新たな観光まちづくりにチャレンジする方々にも光を当て、世代の広がり寸又峡温泉のまちづくりのマインドの広がりを図ることを目的とした。

まずはタイトルだ。若者に対して中高年者、シルバー、登壇者が参加したく言葉が浮かばない。そ、そうだ「せ、先輩にしよう」と閃いたところで「先輩も若者も地域を変える」に決めた。

次はどなたに登壇していただくか、ここが腕の見せ所であり、日頃培ったネットワークが活かされるときである。

基調講演は、以前浜松で「+デザイン思考で、街の元気を取り戻す」の演題でお話を聞き、強いインパクトを受けた甲賀雅章さんに頼もう。氏はCI戦略、ブランディング、コミュニケーションデザイン、新商品開発、空間プロデュース、イベントプロデュースと幅広い分野で活躍されている。大道芸ワールドカップin静岡のプロデューサーとしても知られ、今や海外でも活躍中だ。川根本町との関係も濃密だ。平成23年に千頭駅前にお茶とアートの発信基地「REN」を自らの力で開設した。川根本町文化会館の企画も氏によるもので「小さな町の小さな文化会館の大きな挑戦」として、地域活性化に欠かせない宝物として磨きなおし、地域文化・地域コミュニティの孵化装置を目指す、芸術観光資源として育成するという実に頼もしい思想のもとに活動が始められている。

そもそもまちづくりにはデザインの力が欠かせない。これは思想を形にし共感を得ていく力のことである。また、その設計をする行為そのものである。

このことを実践している甲賀さんの話を皆に聞いていただきたいと氏にお願いすることにした。

第2回目の視点は「若者から先輩へ、そして地域へ」だ。

寸又峡温泉に誰がいるか?長いこと空き店舗だったところを平成24年3月にあられ屋「晴耕雨読」に改装し開店。受けるデザイン、個性的な品揃えに寸又峡温泉にとってすでに存在感のある店に仕立て上げた馬場泰寛さんに出会った。地元で根付いた旅館経営者はいないだろうか?と白羽を当てたのが「飛龍の宿」の望月静馬さんだ。

地元の女性の登壇者が欲しい、町内に音楽教室の先生からまちづくりの旗手になった浜谷友子さんの顔が浮かんだ。NPO法人「かわね来風」を立ち上げかわねグリーンツーリズムを仕掛ける。何しろ「毎日、農業体験を受入れることができる」と言うのだから凄い。ご自身は農業をやってるわけではないので、農家との協力関係がしっかり築いていることの証だろう。



地元の方は先輩格の人ばかりだから、よそ者は全て若者にすることにした。後に「晴耕雨読」の馬場さんからは「私は若者ではないか」とお小言をもらった。

前回の「若者が地域を変える」で登壇した県内の若者以外にも、何かと気になる三人を選んだ。まずは藤枝市観光協会の渡村マイさんだ。観光地ではない藤枝市で「地域人との出会い」と「ローカルさ」をテーマにした観光体験プログラム集「たびいく」を発行している。藤枝に新しい観光の力を注入していく力はたいしたものだ。

次は稲葉大輔さんを挙げた。20代に地元館山寺に戻り旅館業を引き継ぐとともに遠州とらふぐを世に出し、浜松を舞台にした映画「天まで上がれ!」「青い青い空」の二本のプロデュース、「遠州道中膝栗毛」と題した着地型観光を毎日催行する仕組みをつくりあげた。これまでの観光の枠に留まらずに農水産業、商工業者とも関係をつくり、新しいまちづくりを生み出す力は他に類を見ない。

さらに、女性で注目の人はいないか?昨年、静岡産業大学の堀川教授の紹介で会いに来ましたと突然現れた加藤百合子さんが頭に浮かんだ。ベジプロバイダーという農業流通システムを構築、生産者からの農産物の出荷量や品質を、小売業者からは必要な量や納期の情報を随時集める。この情報の共有化こそが加藤さんのビジネスの肝だ。そして㈱エムスクエア・ラボを立ち上げ、女性企業家として日本政策銀行から表彰も受けている。

このところ、県内の大学生が寸又峡で現地研究している。せっかくだから、その研究結果の報告してもらい今後の観光振興策に取入れたいと思った。

静岡産業大学の学生が「寸又峡の現状と問題点の整理。これから若者に魅力的な寸又峡温泉をデザインする。」と題して地域デザイン演習を、また、静岡文化芸術大学の学生も「地域デザイン交流キャンプ」を寸又峡を舞台に実施している。フォーラム当日は指導教官自ら説明していただくことになり恐縮した。念の入った実地調査をもとに若い感覚での提案は大いに参考になり、25年度事業に取り入れたいことが見つかった。

現在、寸又峡温泉活性化策として考えられている「良質の温泉、狭いエリアという地形条件を活かして露天風呂、家族湯からなる外湯を点在させる構想」がある。これを皆さんに示し、構想の実施に弾みをつけたいという趣旨で、小生自ら話すことにした。

「開湯50周年に目に見えることをしたい」と、2年前に望月組合長から相談があった。寸又峡温泉は美肌の湯と呼ぶほどに泉質のよい温泉である。しかし、紅葉、吊り橋に目が行っていて肝心の温泉に真剣に向き合っていないというのが感想だ。今一度温泉に集中しようという提案したのが前述の構想だ。町営露天風呂の老朽化及び空き旅館の存在から、温泉地内に核になる露天風呂の建替えと温泉地内に外湯を空き旅館を改装した外湯を整備したいというのが構想の骨子だ。

昨年夏前に突然、県立大学の西野教授から社会人学生で県内旅館のリノベーションについて研究したい者がいるので相談のついでにあげて欲しいとの電話が入った。早速、望月敏秀さんが訪ねて来られた。取材調査先として県内各地の旅館経営者を10人程を紹介し繋げた。彼の取材で得た内容から、成功する宿のリノベーションに興味がとてもあったので、氏にも登壇願うことにした。

旅館しいては温泉地再生のヒントを見ることができれば幸いだ。

以上が、2回目のフォーラムの目論見だ。

